

我が青春の日本大学経済学部図書館

上 村 能 弘(准教授 経済史)

大学院に入って師匠からはじめに教わったことは、経済史とは足でするものだという事だった。その言葉を聞いたとき、子供のころ、テレビで見た刑事ドラマを思い出した。まだ駆け出しの若い刑事が、人情味あふれるベテランの先輩刑事から捜査の基本を教わるという場面である。現場に何度も足を運び、証拠固めをする。それがつまりは刑事の仕事というわけなのだ。ときには推理や勘を働かせるということがあるのかもしれないが、それはしっかりとした証拠に基づいてのことなのだ。

それ以来、図書館通いが始まった。当時はOPACなどという優れたものはなかったから、紙製の目録カードを指でめくり、これをメモしてエレベーターで地下の書庫に入る。書庫の奥の棚から、200年も前のアメリカ合州国の議会資料を探し出す。必要な箇所を、反故紙で作った付箋を挟む。付箋を挟んだ資料を抱え、再びエレベーターで2階のカウンターに戻り、貸し出しの手続きをする。そこから今度はコピー機まで資料を運び、先ほど付箋を挟んだところをコピーする。コピーが終わったら、また図書館のカウンターまで資料を運び、返却の手続きをする。

ときには、地下1階の閲覧室で、備え付けのマイクロフィルムリーダーを終日回し続けることもあった。しょぼしょぼした目で画面を見つめ、リーダーにかけたフィルムのリールを行ったり来たりさせながら、やはり200年も前のイギリスの資料を探す。なんだか、だんだん眉間が押されるように痛くなってくる。ここだと思ったところで、コピーのボタンを徐に押下すると、フィルムリーダーは、きーきー音を立てながら、あまり鮮明とはいえない資料のコピーを吐き出してくれるのだった。

薄暮のなか、コピーを抱え電車に乗ってうちに帰る。これも当時はパソコンなどという便利なものは貧乏学生にはとても手の出せる代物ではなかったから、神保町の店で一番安かった手動のタイプライターで、メモしてきた目録カードの内容を今度は情報カードにばちりばちりと清書する。そして、持ち帰った資料のコピーを、眠い目をこすりながら辞書を引き引き読んでいく。それをもとに、付箋の原料を大量生産しながら、なにか書いて師匠のところに持って行くと、師匠はいつもそれに赤いボールペンで添削をしてくれるのだった。紙面は、師匠によるめっちゃくちゃな取消線と“達筆”な文字で埋まり、文字通り真っ赤である。持って行った文章は、もはや跡形もなく消え去っている。苦勞の末に判明したことは、ああ、だめなんだということだけである。

それでまた、図書館に行ってこなければならなくなる。当時の経済学部図書館のエレベーターは、油圧で動くようになっており、そのせいで上り下りに際して独特の奇妙な揺れ方をするのだった。その奇妙に揺れるエレベーターのゴンドラのなかで、ひとり不覚にも涙がこぼれそうになる。

200年も前の資料を抱え、ほこりにまみれ、俺は一体何をしているのだろう――。

大学というのが苦しくも輝かしい青春の場であるならば、日本大学経済学部図書館は、まさに我が青春の象徴である。もはや新型となったエレベーターで地下3階の書庫に下りていくと、今でも書棚の陰に軽い咳をしながら本を取り出そうとしている自分と同じ姿を見かけることがある。

閲覧室にも、左の肘を机につき、掌を額に当てながら、右手で本のページをめくるあのときの自分と同じ姿を見ることができる。それを見ると、懐かしいような、哀しいような、それでもやっぱり熱い思いで胸がいっぱいになり、思わずこう叫ばずにはいられない。

みんな、がんばれ！ 本当になんばれ！

学問の道は遙かに遠く、ときにはつらいこともあるだろう。しかし、年が旧り、顧みれば確かに判る——実は、こここそが天国なんだということ。みんな、歯を食いしばって、がんばれ！

がんばれ、がんばれ！！